運船甲第三一号

共同運輸會社ニ於テ海外航路開設之義ニ付伺

海外定期航海開設ニ付別紙之通共同運輸會社ヨリ願出候ニ付熟案ニ要北海道物産直輸出ニ係ル最適商賈易ニ本旨ヲ得タルモノニシテ開拓事業ノ振興スルノ基礎タル固ヨリ論ヲ俟タサル儀ニ候處必何ニ従前邦人海外ニ航路ヲ開キシモノハ僅リニ菱會社カ政府ノ保護ヲ得テ僅ニ上海及ヒ横濱諸港浦塩斯德等ニ航スル數船ニ過キス其他ナシ外洋航海ニ適スル堅牢完全ナル船舶ニ乏シキノ所致ニシテ此勅典タル徹者ノ久シク慨嘆ニ堪ヘサリ抑此地物産ニ多額ニ為ニ支那地方ヘ輸出相成モノニ有之候変ニ運便ヲ不得ヨリ止ムヲ得ス產地ヨリ之ヲ横濱神戸馬関長

内閣文庫

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

崎等ヘ積送リ依諸港ヨリ更ニ外國船又ハ三菱會社船等ヘ積移シ以テ海外ヘ輸出スルヲ常トス故ニ物價ヲシテ往ニ高貴ナラシム若シ之ヲ產地ヨリ直ニ輸出スルニ於テハ價大ニ低廉ナルヘク隨テ貿易上輸出入ノ兩額ヲ增加シ一舉ニ兩全ノ得策タル論ヲ俟タス且本邦ノ如キ四面環海ノ邦國ニ在テハ海軍ニ係ル運送船ノ如キモ亦隨テ多數ヲ要スル勿論ニ有之然ルニ平常之ヲ豫備スルハ莫大ナル國費ヲ要シ甚タ難事ニ有之ニ付テハ該社ノ船舶ハ金令書ニ第五條ニ明揭セル如ク戰時及ヒ非常ニ際シテハ政府ノ使用ニ供スヘキ義務アルモノニ付毫平常外洋航海ニ堪ヘキ船舶ヲ維持シ海員ヲシテ其技術ヲ練リ兼テ海外諸港ノ地勢ヲ諳知セシムルハ最緊要ニ之ニ有ニ然ルニ該航路ヲ開設セシハ其要スル所ノ費額亦僅少ナラス其

第一線路即チ函館ヲ基地トシ浦塩斯德元山津釜山浦ヲ廻航シ長崎ヲ經テ上海ニ達スル航路ノ如キハ凡ソ二艘ヲ以テ一年二十航海ト定メ其要スル所ノ費額ハ別紙計算書ニ通收支差引拾五萬六千五百八拾壹圓ノ不足ヲ生シ其第二線路即チ函館ヲ基地トシ樺濱神戸馬関長崎厦門ニ寄港シ香港ニ達スル航路ノ如キハ前金樣瀛船二艘ヲ以テ一年二十航海ト定メ收支差引貳拾四萬三千九百壹拾壹圓合計四拾萬五百拾三圓ニ不足ヲ生スル計算ニ有之ニ付テハ創設未幾該社經濟ノ能ク支辨シ得ル所ニ無之ニ去トテ今ニシテ邦人ノ奮起ス此航路ヲ創開スルニ非サレハ早晚ヲ高ノ為メニ此航利ヲ壟斷セラレ了火ヲ視ルカ如クナラシ故ニ寧ロ此保護策ニ依ル英斷ヲ以テ該社ノ請願ヲ聽許シ此航路ヲ創開シ

内殖産ノ道ヲ開キ外貿易ノ業ヲ活潑ニシ以テ倍々東洋航海通商ニ二權ヲ占有スルノ政略ニ出ラレレ
ヲ只管冀図シ不惜巨費尤市裁可ノ上ハ該航路ニ係ル郵便物無賃運送可為致ハ勿論他非常ニ際シ
政府ニ於テ之ヲ随意使用スルノ條項ハ當省ヨリ命令書ヲ下付可致ニ付該航路ニ属スル航海費合金
四拾萬五百拾三圓今ヨリ概ネ十ケ年ヲ期シ國庫ヨリ支出ス助成相本候様致シ度尤右年限中ト雖モ収支
計算略相償候場合ニ立至ル迄ハ右ニ支出ヲ不仰積ニ付依テ別紙書類相添ヘ急仰裁令ス也
但曩ニ三菱會社ニ貳拾五萬圓ノ助成シ上海定期ノ航路ヲ開設ス致候ハ来支那貿易上ニ一大活動ヲ與候ノミナラス政策上ニ於テモ間接ノ利益又甚タ大ナル

義ニ有ニ然ニ動モスレハ外人常ニ我航利ヲ壟斷セントスル顕証ノ含迹次第ニ之ヲ絶サル義ニ候ハ此條
本議ノ航路ハ其国運輸会社ヲシテ開設ス致ハ
次両社互ニ對峙シテ隠然外航ヲ駆逐シ内海ハ勿
論東洋航海ノ利ヲ占有スルノ基礎ト可ニ成ニ付
本議ニ至厚ク採評議ヲ盡サレ度ク申添候也

明治十七年十月　農商務卿西郷従道

左大臣熾仁親王殿

伺ノ趣助成金下付ニ儀ハ差向詮議
ニ及ヒ難ク候ニ付
明治十七年十月廿一日

海外ヘ定期航路開設之儀ニ付願

運輸交通ハ開明ノ大本ニシテ宇宙間凡百ノ事一モ之レト相伴テ進退消長セサルモノナシ就中殖産貿易ノ事ニ至テハ運輸ノ便ヲ藉ラスンハ一歩モ進ムヿ能ハサルハ敢テ喋々ノ辯ヲ俟タサルナリ欧米各政府ノ相競テ海陸ノ運便ヲ奬励帮助シテ他國ニ凌駕セントス務ムルモ畢竟各自ノ商權ヲ擴張スルノ企望ニ外ナラス孰カ殖産貿易進歩シテ而後運輸ノ道開クヿヲ云ンヤ運輸ノ便アツテ始テ物産ノ増殖貿易ノ振起ヲ希望スヘキナリ

近時欧米各國東洋ノ貿易ニ無涯注目スル日一日

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ヨリモ甚シキハ佛ノ東京ニ於ル魯ノメルウニ於ル現狀ヲ以テ其一斑ヲ窺スルニ足ラン間ク獨乙ニテハ四百万マルクノ保護金ヲ年々支出シテ東洋ノ郵便船路ヲ開クノ企アリト又聞ク英領米國カナダブリテスコロンビヤ州ニ於テハ太平海ト大西洋ト接續スルノ鉄道ヲ架設シテ歐亞間ノ交通ニ一層ノ辨利ヲ與ヘ此間ニ生スル運輸ノ大利益ヲ占領セント既ニ其大工事ニ着手セリト是等ノ事ノ耳朶ニ觸ルヽ毎ニ其熱心鋭意ナルニ驚キ且歎セスンハアラサルナリ

倩我國ノ地位ヲ按スルニ太平洋中ニ峙立シテ遠ク米國ノ西岸ヨリ近クハ魯領及朝鮮清國ヲ扣ヘ宗カモ九重ニ聳シテ百蠻ヲ朝セシムルノ地位ニ立テリ而シテ其各邦ハ如何ナル地ナリヤト問ヘハ東方米國ノ西岸ニハ富饒ノ名高キカリフオルニヤ州及英領ブリテスコロンヒヤ州アリ殊ニ鉄道ノ直線ニ連直シテ東岸ニ達シ大西洋ニ闖入シテ歐洲ニ接續スルノ運便アリ又西方支那ニハ東洋第一ノ熟鬧地トモ稱スヘキ香港廣東廈門アリ直ニ其レヨリ北方ニ向テハ上海ヨリ朝鮮仁川釜山元山津魯領浦塩斯德等アリ皆何レモ海運ノ福田ナラサルハナシ試ニ囮頭一看スルニ香港廣東廈門ノ運輸ニ於テハ其道ヲ我レニ藉ラサルハナシ實ニ天賦ノ海運國ト謂フヘシ既ニ此好地位ニ

居リテ東洋運輸交通ノ權ヲ掌握スルニ何ノ難キカ之レアラン五尺ノ童子ト雖モ容易ニ知リ得ヘキ事理タルヘシ

我政府ハ夙ニ此ニ觀察セラルヽ所アリテ明治八年中數万ノ金ヲ三菱會社ニ貸與シテ我沿海及清國上海間ノ航路ヲ占有セル太平海飛脚船会社ノ所有船ヲ購入セシメシカハ爾来竟ニ此航路ニ於テハ外國ノ旗章ヲ掲クル船舶ノ往復スルモノヲ見サルニ至レリ此事ヤ啻ニ國光ヲ發揚セシノミナラス清國北部トノ貿易ニ一大進歩ヲ與ヘ又清國米國間ニ生スル運輸ノ利益モ横濱ヨリシテ以西ハ我國旗ノ占領スル所トナレリ是レ偏ニ我政府カ適当ナル保護ニ吝ナラサル恩惠ト云ハサルヘカラス然リト雖モ廣ク一般ノ形狀ヲ顧レハ殆ント慨歎ニ堪ヘサルモノアリ何トナレハ貿易ト云ヒ運輸ト云ヒ多クハ外國人ノ掌中ニアリテ我レハ天賦ノ好位地ニ居ルモ未タ其利ヲ利スルヿナク空ク傍觀坐視スルガ如キ現狀ナルニアリ

今ヤ各國ノ東洋ニ出遊スル前述ノ如シ豈啻上海ノ一航路ヲ占有スルヲ以テ安心滿足スヘケンヤ畢竟此航路ト雖モ早ク之ヲ取リタレハコソ我有タレモ今日ニテモ外國人中窃カニ望ヲ懷ケルモノ少カラス唯先鞭者ノアルアリテ之ヲ破ルノ難キヲ以テ默止スルノミ宜ク彼レノ未タ鞭ヲ揮セ

サルニ遠シテ我レ先ツ枢要ナル航路ヲ開通シ彼レノ闖入ヲ豫防スヘシ

爰ニ一日モ猶豫スヘカラサル緊急必要ナル航路

就保アリ即チ第一保ハ函館ヲ発地トシ魯領浦塩斯徳朝鮮元山津釜山浦ヲ巡航シ我長崎ニ寄泊シ直ニ上海ニ達シ帰航モ亦前路ヲ取ルモノトス其第二保ハ函館ヲ発地トシ横濱神戸馬関長崎ヲ経テ厦門ニ寄港シテ香港ニ達シ帰航ハ香港ヨリ台湾竹狗ニ渡リ夫ヨリ長崎馬関神戸横濱ヲ経テ函館ニ着スルモノ是レナリ（此両保路ノ必要ナル理由ハ別紙説明書ニ詳カナレハ茲ニ縷説セス）如此北海道ヲ発地トシテ我國腹背ノ航路ヲ擴張シ旭旗ヲ掲クル汽船ノ

支那日本海ヲ間断ナク航行セシムルトキハ当初数年ノ間ハ運輸ノ営業上ニ於テハ利益ヲ見ルヿ固ヨリ難シト雖モ我國全体ノ貿易ハ日ヲ逐テ昌盛ニ赴キ物産ハ月々増殖セン一必ス豫想ノ外ニ出テ所謂運輸ノ便アツテ物産貿易振起スルノ実ヲ見ル年ヲ期シ待ツヘキナリ況ヤ北海道ノ如キ其殖産ヲ奬励スル之ニ勝ルノ術アラサルヘシ加之今日外人ノ赤タ手ヲ下サヽルニ及ンテ此航路ヲ閑キ多少ノ困苦ヲ忍ヒ信用ヲ博スルニ至ラハ竟ニ外人覬覦ノ念ヲ絶チ永ク此航利ヲ我カ旭旗ノ下ニ収メ大ニ我商権ヲ振起スヘシ豈ニ眼前ノ難易ヲ論シ逡巡趦趄スルノ秋ナランヤ

今ヤ本社不似ト雖モ共同ノ力ヲ以テ海運ノ業ニ任セリ近時東洋ノ貿易ヲ通觀シテ感奮ニ堪ヘス將サニ卒先此両路ヲ開航セントスレヽ計画ヲ尽ス一日ニアラスト雖モ如何セン創業日浅ク赤タ尋常営業ノ利益ヲモ見ル能ハス爭カ斯ル新事業ヲ企ルノ餘力アランヤ良シヤ資本ニ酬カノ餘剰アルモ其資本ナルモノハ乃チ公衆ノ資財ヲ蒐集セシモノナレハ假令將来ハ確乎タル利益アルモ前途尚ホ遠キ事業ニ向テ之ヲ投スルハ一般株主ノ人情ニ對シテ行ヒ難キ次第殆ント落膽ノ外無之就テハ甚タ難申出請願ニハ候得共此両線路ニ係ル郵便物其他官用物運送ノ御用被仰付御命令書第七條ノ趣ニ依リ應分ノ御助成金ヲ賜リ以テ本社ヲシテ此事業ニ盡力セシメラレンヿヲ奉冀望候是レ敢テ本社一已ノ利益ヲ謀ルニハ無之実ニ我國將来ノ鴻益ヲ起シ候儀ニ付前述ノ事情御明察特殊ノ御詮議ヲ以テ御採納被成下度別紙説明書概海表概要書相添此段奉懇願候也

共同運輸會社々長

伊藤雋吉

明治十七年十月

農商務卿西郷從道殿

説明書

第一線

函館ヲ発地トシ魯領浦塩斯徳朝鮮元山津釜山浦ヲ巡航シ我長崎ニ寄泊シ上海ニ達ス帰港モ亦前路ヲ取ル

但本線ハ四月下旬ヲ初航トシ十一月下旬ヲ終航トス

函館ヨリ上海ニ運輸スル重モナル物産ハ北海道ノ海産ニシテ其内海鼠干鮑干鰕等ハ金額多キモ荷嵩少ケレ氏昆布類ニ至テハ其数ノ廣大ナル明治十六年関税局ノ報道ニ由レハ貳千貳百三拾四万三千五百斤ナリトス而テ此運送ハ是迄函館ヨリ横濱ニ送リ横濱ニテ三菱會社ノ飛脚船ニ積移シ

テ上海ニ至ルヲ常トス然ルニ此昆布タル一ト度ビ雨露ニ暴セハ忽地全体ニ腐敗ヲ来スノ懼レアリ又必ス許多ノ欠減ヲ生スルヲ以テ時トシテハ外國船ノ浦塩斯徳ニ来リシ帰途亟館ニ寄港シテ上海ヘ直輸スルアリ又時トシテハ外國風帆船ヲ雇フテ運搬スルアリテ往々外國船ニ此航利ヲ獲ラルヽニ至ル是レ全ク我國ノ汽船ニ上海ノ直航ヲ為スモノ無キノ致ス所ナリ故ニ此直航路ヲ開設スルハ外國船ノ帆影ヲ此海上ニ絶タシムルハ言ヲ俟タサルナリ是レヲ此保路開設ノ主眼トス而シテ北海道ノ物産ハ漸次浦塩斯徳ニ輸出シテ其需用ニ給シ延テ朝鮮ニ及ホスヘシ加之浦塩斯徳ヨリ上海ニハ毎ニ枚類ノ運搬アリ又朝鮮ヨリ長崎ヘモ多少ノ貨物アルヘシ又帰航上海ヨリ朝鮮ニハ天竺木綿金巾ノ類数多ノ輸送アリ明治十六年釜山元山ノ輸出入ヲ看ルニ

釜山

輸入金額八拾壱万四千三百四拾四円餘

輸出金額九拾万三千五拾三円餘

元山

輸入金額三拾九万四千百六拾五円餘

輸出金額五拾万千三百拾七円餘

又浦塩斯徳ヘ輸入スル船舶ノ数ヲ見ルニ明治十六年四月九日ヨリ十二月四日迄ニ汽帆合計四拾

五艘内外國船三拾四艘日本船十一艘ナリ此輸入荷物ノ重要ナルモノハ白米三万四千六百七拾六俵小麦粉五万九百九拾壱俵小麦壱万四千三百九拾三俵塩壱万三千六百拾俵等ニシテ皆長崎又ハ神戸ヨリノ搭載ニ係リ其他ハ欧洲等ヨリ来ル織物雑貨又ハサカレーン島ヨリ来ル石炭等ニテ其織物雑貨ハ壱万四百三拾八噸石炭ハ三千拾六噸ナリ而テ此地ニ往来スル外國船ハ一モ定期ノ航海ニアラスシテ臨時ノ雇船ノミナレハ今此定期ヲ起スヤハ此航利ハ靡然トシテ我レニ帰セン

函館ヲ発地トシ横濱神戸馬関長崎厦門ニ寄港シ香港ニ達シ帰航ハ香港ヨリ

第二線

台湾打狗長崎馬関神戸横濱ニ寄港シテ函館ニ着ス

但本線ハ終年休航ナシ

本線中横濱ト香港トノ航路ハ数多ノ汽船日々往来シ運輸ノ便敢テ他ヲ特ムニ不及カ如シト雖モ神戸長崎ヽ寄港スルモノハ三菱ノ汽船ト英國ノ郵船トナリシカ三菱会社ハ既ニ此航路ヲ廃シタレハ今ハ英國郵船ノ専有スル所トナレリ若シ此但放過セハ必スヤ佛國郵船モ航路ヲ神戸長崎ニ取ルニ至ラン果シテ彼レ先鞭ヲ着ル所トナラハ遂ニ噬臍ノ悔ヲ招カン宜ク速カニ我カ艙タルヲ徙キ彼ノ企望ヲ制スヘシ

北海道ノ物産ニテ清國南部ヘ輸出スルモノモ亦頗ル多シ明治十六年関税局ノ調査ニ依リテ算スルニ昆布硫黄海鼠干鮑塩魚類等ニテ凡五百三拾万斤此代價三拾五万円餘ナリ是等ノ物品從来多クハ一旦横濱ニ運搬シ此ニテ入庫シテ清國ニ販賣シ再ヒ香港ヘ輸出スルヲ以テ為メニ冗費ヲ加フルノミナラス物質ヲ損シ斤量ヲ減スル等其損害勝テ羨フヘカラス是レ直航船ナキノ致ス所ナリ故ニ今斯ニ直航ノ定斯ヲ開クトキハ是等ノ物品ハ擧テ其船ニ依頼スヘキハ云フ迄モナク濠洲ヘ輸送スル硫黄ノ如キモ今ヨリ一層盛大ニ趨キ一般ノ貿易モ為メニ面目ヲ改ムヘシ加之横濱神戸長崎ニ寄港スルハ則チ三菱会社ノ既ニ廃棄セル運便ヲ再興スルモノナレハ此間ノ商賣社會ニ便利ヲ與フルハ少小ニアラス試ニ三菱會社ガ曾テ香港ノ航路ヲ開キシ為メ神戸港ノ輸出入ニ著シキ増加ヲ現ハシタルヲ見ルニ即左ノ如シ

	神戸輸出	全輸入
明治十年	三、二八二、三三九円	三、九七〇、七一九円
全十一年	三、四一七、八二二円	五、八二九、三七三円
全十二年	四、八九四、六〇八円	六、四九三、三八八円
全十三年	四、四二四、一五一円	七、一二六、六五二円
全十四年	四、三六八、九二五円	七、〇二七、七三六円

明治十五年　六、三四五、五七三円　六、三七六、七八五円

又厦門ノ寄港タル從前横濱神戸ヲ經テ此ニ至ルモノハ製茶輸出ノ時ニ當リ米國行ノ船舶ガ寄港スルニ止リタレ𪜈今後間斷ナク寄港セハ小麦ノ如キ時々ノ輸送ニ著キ便利ヲ來スヘシ明治十六年中厦門ヘ輸出ル麦ノ數量ヲ擧レハ

凡千五百五拾四万貳千斤

此金額拾八万六千四百貳円

帰航ニ厦門ヲ經サルモノハ全所ヨリ我國ヘ輸入スルモノ無レバナリ故ニ香港ヨリ直ニ台湾打狗ヘ渡リ此ニテ我國ヘ輸入スル砂糖ヲ搭載スヘシ抑臺湾ヨリ我國ニ入ル砂糖マ実ニ大ナリ其明治十六年中ノ数ハ

凡貳拾四万担

此量貳千四百万斤

此航運ヤ元来帆船ノ專有スル所ナレ𪜈社會ノ気運漸次汽船ニ傾キ商賣曰ニ月ニ活潑ニ趨クヲ以テ必スヤ遠カラスシテ帆船ノ運後ニ耐ヘサルニ至ラン尤打狗ハ沖積ニシテ大船ニテハ少シク難儀ノ場合モアルヘケレト絶ヘス寄港スル𪜈ハ遂ニ此航運ヲ汽船ニ変換スヘキハ最モ看易キ理由ナリ

右第一線ハ千二三百噸ヨリ千五六百噸第二線ハ千五百噸ヨリ貳千噸位ノ汽船各二艘合四艘ヲ以

テ定期ニ充ツヽシ而テ両線ノ航路同シカラス且寄港ノ多寡アツテ全日数ヲ以テ囲航スル能ハス長崎寄港ノ際毎時両路ノ船舶出會シテ交互荷物ヲ積換フルノ便ヲ得カレハ全港ニハ常ニ適当ナル倉庫船ヲ備ヘ置キ一時之ニ荷物ヲ移積シテ空シク他船ノ入港ヲ待ツカ如キヿ莫ラシムヽシ

往航　帰航

航海碇泊時間概表

第一線

発地	出帆時刻	航海時間	着地	入港時刻	碇泊時間
函館	一日 正午	三十時	浦塩斯徳	二日午後六時	十六時
浦塩斯徳	三日午前十時	三十三時	元山	四日午後七時	十七時
元山	五日 正午	三十時	釜山	六日午後六時	二十二時
釜山	七日午後四時	十六時	長崎	八日午前八時	四十四時
長崎	十日午前四時	四十八時	上海	十二日午前四時	三十五時
上海	十三日午後三時	四十八時	長崎	十五日午後三時	二十四時
長崎	十六日午後三時	十六時	釜山	十七日午前七時	二十四時
釜山	十八日午前七時	三十時	元山	十九日午後一時	八時
元山	十九日午後九時	三十三時	浦塩斯徳	二十日午前六時	十時

往航

浦塩斯德	廿日午後三時	三十時	函館
			廿二日午後九時

往復一周日數二十二日

内 航海十六日 碇泊六日

第二線

函館	一日午後四時	四十八時	横濱
横濱	四日午後六時	三十六時	神戸
神戸	六日午後六時	二十四時	馬関
馬関	七日午後七時	十五時	長崎
長崎	九日午後六時	百二十時	厦門
厦門	五日午後六時	二十四時	香港
香港	十八日午後六時	二十四時	打狗
打狗	三十日午後六時	百二十時	長崎
長崎	廿日午後三時	三十時	函館
馬関	廿七日午後九時	七時	神戸
神戸	廿九日午前七時	十時	横濱
横濱	一日午前四時	三十六時	函館
函館	四日午後四時		

往復一周日數三十四日

内 航海二十四日 碇泊十日

帰航

費用概算

第一線ノ分

一 金壱千五百円　　兵組負給料

一 金五百三拾円　　公賄料

一 金七百三拾円　　船具料

一 金八百円　　小修繕費

一 金三百円　　通常雑費

一 金貳千五百円　　積立金（船價貳拾万円ト二ヶ年割二分ヶ月分）

計金六千三百六拾円　但一日金貳百拾貳円

以上ハ瓶海破泊ノ別ナリ要スルモノトス

外

金八四　　紙海賃　一日分
金百拾壱四　　上海噸税　一艘分
金百六拾八四　　出入港税　一艘分
金百八拾四　　焚炭百歳　一昼夜三十噸　一噸金六四

一

右々當リヲ以テ一艘海及一週年ノ費額ヲ計算スレハ

金六千貳百七拾貳四　　紙海日數十六日ノ費用
金千貳百七拾貳四　　碇泊日數六日ノ費用
金貳百七拾九四　　噸税及港税
一金七千八百貳拾三四　　一紙海入費

四月下旬ヲ初航トシ十月下旬ヲ終航トシ此間紙海ヲ為ス十回トス

金七万八千貳百三拾四　　一艘一年ノ費用

流船貳艘ヲ以テスレハ

金拾五万六千四百六拾四
外ニ陸上ノ入費即チ各地支店設置及ハ出張人ヲ置リ等ノ費用ヲ加リ

金三万四

合計金拾八万六千四百六拾四

右々毎ヘ

金八万九千八百七拾九四　　収入益金

但別紙諸書ノ通リ

差引

金九万六千五百八拾壱円　不足

外二

金六万円　汽船貳艘ノ代價ニ對スル利子　一艘ニ付五万円　年一割二分

通計

金拾五万六千五百八拾壱円　不足

第二線之外

一金千八百五拾円　兼組負債科

一金五百八拾円　仝賄料

一金八百三拾円　船具料

一金八百円　小修繕費

一金三百六拾円　通常雜費

一金四千百円　積立金　船價四十壱万円ト一ヶ年一割二分ノ利子

計金八千五百貳拾円　但一日金貳百八拾四円

以上ハ振海破砕ノ別ナリ要スルモノトス

外

金貳百四拾円　焚料石炭　一昼夜四十噸　一噸金六円

金八四　　艇海費　一日分
金貳百四拾貳四　出入港税　一艇海分
一
右之當リヲ以テ一艇海及一週年ノ費額ヲ計算
スレハ
金壱万貳千五百七拾六四　艇海四艘二十四ノ費用
金貳千八百四拾四　磯伺四艘十四ノ費用
金貳百四拾貳四　出入港税
一金壱万五千六百五拾八四　一艇海入費
壱ヶ年間十艇海トシ
金拾五万六千五百八拾四　一艘一年ノ費用

汽船貳艘ヲ以テスレハ
金三拾壱万三千百六拾四
外ニ陸上ノ入費同上
金貳万五千四
合計金三拾三万八千百六拾四
右之内へ
金拾九万貳千六百貳拾八四　収入益金
但別紙諸書ヲ通リ
差引
金拾四万五千五百三拾貳四　不足
外ニ
金九万八千四百四　汽船貳艘ノ原價ニ對スル利子　一艘四拾壱万四
年一割二分

通計

金貳拾四万三千九百三拾貳圓　不足

收入金概算調

收入金ノ義ハ實際經驗ノ上ニアラサレハ目途立チ難シト雖モ今仮リニ関税局調査ノ内外輸出入表ニ據テ目標ヲ立ツ然レトモ其原價ニ由リ運賃ノ歩合ヲ定ムルハ甚至難ニシテ就中第二線原價中ニハ生絲織物等原價ノ高キモノ大部分ヲ占メ居ルヲ以テ是等ハ大概ヽ區別シテ其運賃ヲ算出セリ

第一線

横濱上海間　神戸上海間　長崎上海間

函館上海間　釜山元山　浦塩斯德

輸出入原價合計

金五百三拾九万貳千七百六拾壱円　但原價百分ノ五ヲ以テ運賃トス

此運賃金貳拾六万九千六百三拾八円

右運賃ノ内三分ノ一ヲ本社ノ船舶ニ占有スルモノトシテ

収入金八万九千八百七拾九円　但一ヶ年分

第二線

横濱香港間　神戸香港間

長崎香港間　函館香港間

輸出入原價合計ニ内

生絲織物其他高價品

金千四百貳拾壱万三千百六拾壱円　但原價百分ノ一ヲ以テ運賃トス

此運賃金拾四万貳千百三拾壱円

金千六百四拾貳万貳百五拾壱円　但左百分ノ五ヲ以テ運賃トス

此運賃金八拾貳万千拾貳円

運賃合計

金九拾六万三千百四拾三円

右運賃ノ五分ノ一ヲ（本線路ハ外国汽船ノ航海頻繁ナレ第一線ト左視スヘカラス故ニ如此）本社ノ船舶ニ占有スルモノトシテ

収入金拾九万貳千六百貳拾八円　但一ヶ年分

運船甲第三一号

共同運輸会社ニ於テ海外航路開設シ
候ニ付テハ官用書及ビ国旗掲揚ノ儀
可ト対ツベキ方法及ビ国庫ノ補助ヲ
願度ニ付テ

豊高務郎西郷従道

明治三年十月

大隈伯爵我敬

別紙農商務卿上請共同運輸會社助成金之儀
審案イタシ候處海外航路ノ開設ハ目下ノ急務
ニモ可有之候得共財政上ノ都合實々不得止ヨリ
既ニ御許可ニ相成居候同社株金ヘ交付スヘキ貳百
六拾萬圓スライマダ全ク交付ノ運ヒニ至リ兼百餘萬円
ノ未交付額有之候次第ニ付目下更ニ助成金御下付
ノ儀ハ決シテ支出ノ見込無之候間將来財政上ノ
目的粗ヽ相立候上何分ノ御詮議相成可然此際
ニ在テハ謹然御聞届無之様イタシ度別紙上呈此
段及上申候也

明治十七年十一月十二日　大蔵卿松方正義

太政大臣三條實美殿

農甲三四七號

明治十七年十一月十四日

内閣書記官

大臣

農商務省上申共同運輸會社ニ於テ海外航路開設ニ付助成金ヲ請フ事

（御諮議及ヒ難キ旨指令案）

右回議ニ供ス

參議

大木　伊藤　井上　松方　川村　佐野　山縣　西郷　山田　黒田　福岡

親展

明治十七年十二月十四日

第一局

書記官

抑参議

別紙農商務省上申共同運輸会社定
期航海一五設ノ義ハ北海道ヲシテ直
ニ支那ニ輸出入ノ目的ヲ以テ銀七万
ノ上海香港ニ二隻ノ汽船ヲ新設スルノ計畫ニ
之ニ要スル費額四拾万円余ノ
不足ヲ生スベキ見込ニ付今ヨリ向十七年ヨリ翌

毎年有之額ヲシテ国庫ヨリ補給ス成
所ノ義ニ尽テ国ヲ築スルニ本邦ニ於テ海外
ニ航路ヲ開キシハ独リ三井会社ニ止リ如ク
只今会社ニテ又ハ政府ニ於テ両社ヲ共
時ニテ抗衡ノ実益ヲ保チ難キ実ニ必要ノ如ク
而シテ之ニ対シ近時内閣多端ヲ以テ未ダ
ニ再議ニ内申セラレタルニ過ギサルニ
ニ間近ニ迫ル海陸ノ日ヲ待テ両会
所決議ノ成ル晩ヲ待ン間左
案ノ通ル協合ス成ル所ノ体ニ就テ

右協合ス成
助成金ヲ付ス義
問ノ通ル
差向決議ニ及ブ
明治十七年十月廿一日（長官）

樞密

小樽開港地實見ノ爲メ各國公使招待ノ義建議

小樽ハ北海道西部樞要ノ良港ニシテ之ヲ開ノ時ハ將
来拓地殖民上一大進歩ヲ促シ國家ノ鴻利ヲ興スヘ
キハ必然ノ義ト存候然ルニ其開否ノ影響各地利便
ノ如何ニ就テハ着手ノ遲速ニ因テ又大ニ得失有之モ
ノニ候得ハ當初宜シク眞密ノ議ヲ悉シ廣ク内外當
路者ノ意見ヲ問フノ最緊要ナルヘシ論開港ノ事ハ主
トシテ外國人ニ關係候義ニ付此際實地閲覧ノ爲メ
在京各國公使等ヲ招待シ其適否鑒定ノ報告ヲ
取捨シ然後御決行相成度元来新開ノ地方ハ人口
寡ナク物産多カラス其ノ現況ニ就テ論ヲ下ス時ハ或ハ
開港ノ得失如何ノ説ハ凡ヘシト雖トモ其挙措宜